

大和高原の巨石（磐座）伝承

(続四)

会員

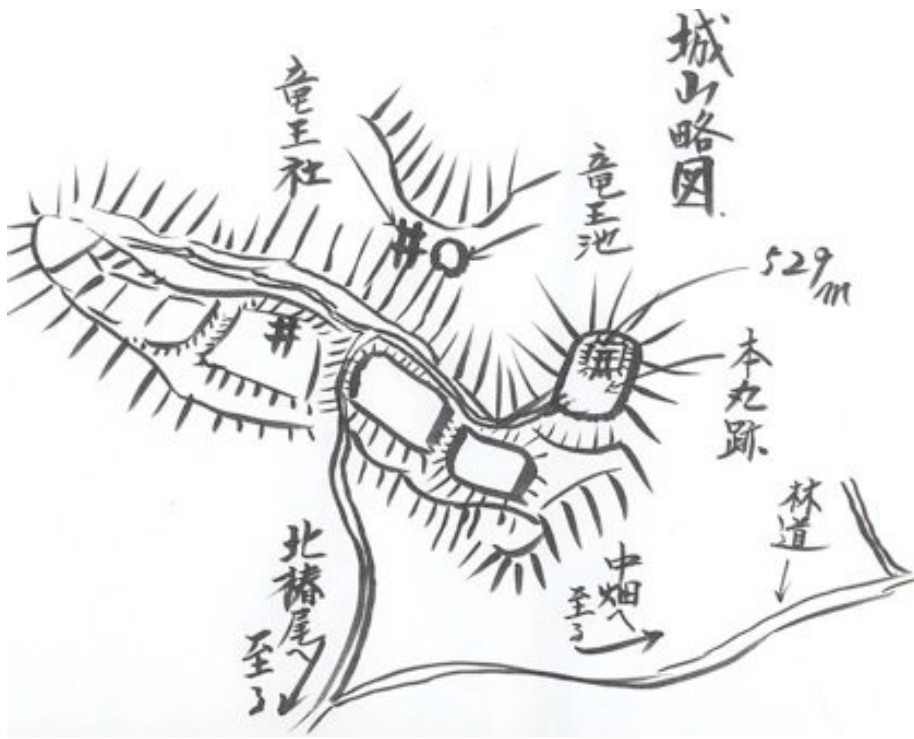
植村勝

前回に書いた大國見山の北の谷は高瀬川が流れ榎本から佐保川に合流する。谷の北側は古代豪族和邇氏の本拠地で東大寺小古墳群は和邇氏一族のものと考えられる。その中の北高塚古墳（前長一四〇米の前方後円墳、四世紀末築造）からは、中平年号銘の鉄剣が出土した。中平年間は一八四年〜八九九年である。何故この古墳に副葬されたのか不明であるが古代史を解き明かす鍵であろう。谷の南側は物部氏の本拠地で大塚古墳（一一五米）東隣のウワナリ古墳（一二七米）の前方後円墳など多数あり、後期に属する物部氏の首長級の古墳であろう。また、この谷筋を東西に昭和四十年名阪国道が開通して大阪と名古屋を二時間あまりで結ぶ。一日一〇万台の車が通っている。奈良に都（平城京）が移されたのが和銅三（七一〇）年、今まで明日香地方から榛原・伊勢・榛原・名張、東国への重要なコースである奈良名張間の道が、霊亀元（七

一五）年大和高原を通り開通する。奈良和邇、岩屋、福住、都祁、名張の街道で、政治、経済、斎宮の道となった。また、奈良↓古市寺（廃）↓横井寺（廃）↓山村寺（廃）↓願興寺（廃）↓弘仁寺↓竜福寺（廃）↓桃尾ノ滝↓三光寺（廃）↓笠寺↓長谷寺への参拝観光道が繁盛した。名阪国道は天理東インターから大和高原へ高低差四百五十拾米余り登る為北に迂回するのだが北方に山頂が平らで高い山が見える。城山（五二九米）である。山頂には規模の立派な中世城跡がほぼ完全に残っている。別名椋欄（シューロ）山と言う。高樋川、菩提仙川の源流である。高樋川の中流に位置する虚空蔵町（奈良市）には、空海が弘仁年間創建した日本三大虚空蔵の一つ弘仁寺がある。菩提仙川中流の菩提山町（奈良市）には正暦年間に建てられた正暦寺がある。両寺とも元号を寺名とする古刹で多くの文化財を蔵し、佐倉紅葉の名所である。城山には中世筒井順昭（順慶の父）が一五一〇〜三〇年頃山城を築いた。更に

天文十六（一五四七）年人夫を集めて普請をするため寺社に依頼している。その後のことは不明である。三好長慶の臣松永久秀は永禄二（一五五九）年大和信貴山城に入り、瞬く間に大和の土豪を服従させ、大和を支配するようになる。筒井氏の本拠地筒井城は永禄八（一五六五）年松永勢に落とされ、大和高原（東山内）の親戚同盟衆を頼り潜伏し、ゲリラ戦を行った。元亀元（一五七〇）年筒井順慶は松永軍攻撃の重要地とするため城を改修する。これが今残る跡地の状況である。次の年松永軍を辰市城におびき寄せ、この城から出陣大勝するのである。討ち取った首、二百数拾を織田信長に差し出し信長の信任を得る。そして天正四（一五七六）年大和守護に任じられる。次の年松永久秀父子は信長に背き、攻められ、信貴山城に火を放ち滅びる。

大和国の土豪（衆徒、国民）衆の安堵も東の間土豪の居城を天正八（一五八〇）年信長は大板石山本願寺を下すと、大和国は郡山城



以外の城を破却せよと筒井順慶に命じた。ここに大和の中世城の役割は終わる。この城山の城も上部

建物等は破却されたが、土形は山上のため放置され図のような跡を残している。



城山の岩群

古代信仰磐座は本丸跡#印の位置か、現龍王社南側に岩が連なり神秘的な上の #印あたりと考えられる。そして雨乞い、雨とめの山(神)としてひきつがれ、龍王社(写真) 向って左に龍王池がある。正月の注連縄や管理は奈良市北椿尾の方が行く。雨の降らない年は近隣の村々が登って龍王社に雨降りをお願い、龍王池の水をかい、大とんどをして(火上げ)般若心



城山山頂近くの郭部の岩群

経を唱えた。中畑村(現奈良市中畑町)の場合も太鼓を鳴らし鉦をたたいて城山に登って火上げ(大とんど)を行いみんなで般若心経を唱え雨の恵みを祈願した。中世城が築かれ山の形は変わったが、近隣の農村の信仰の山、水源の聖地として崇められた。雨乞い行事は、雨を願うのはもちろんであるが農村自治共同体としての結びつきを強め、譲り合う心遣い

を育んだであろうし、火の持つ神
秘と幻想を味わったのであろう。
また、農業生産に対する努力を示
し、その年の早魃に対する減免の
配慮を促す欲求もあったのかもし
れない。こうした農民の取り組み
は雨乞いに限らず荘園領主や近世
になってからの藩政に於いても増
産の取り組みや行事を奨励してい
たものが農村の年中行事化したも



のが多い。オコナイ、田の虫送り、
風の祈禱等である。

次の塔の森は城山東方3kmの
奈良市長谷町に位置する六六〇米
の山で山麓周辺の村々の信仰の山
であったし今もそうである。古代
からこの神の山「塔の森」がどう
伝えられてきたかを山頂や周辺に
残る信仰対象物を通して考えてみ
たい。それは次のように引き継が
れた。恵みの神が降りる山↓水の
神が加えられ↓古墳が造られた↓
修験場の一つとなり神仏が祀られ
六角十三重石塔（凝灰岩）を建て
た↓白砂川の源流に竜王神を祀つ
た↓寺や社が中腹に営まれた↓寺
は集落中央に移され再々、二車線
道路沿いに新築された公民館に移
された。この内容について時代を
追って説明していこう。山麓の農
地が区画整理事業を進めるため事
前発掘調査を行っている。（今後
も続く）その結果、縄文遺跡が多
数発見され、当時の人たちがどん
なかたちで崇拝していたか、まだ
証はないが抛り所にした山であつ
た。古墳時代後期山頂にこの地域

の長の墓を築いた。近くの山には
「キョウモンズカ」（経文塚）と
言う塚があり金鶏が埋まっていた
正月元旦に鳴くという伝承もある。
次の時代は奈良時代後期六角十三
重石塔が建てられた。そのとき、
磐座など古い信仰対象物は取り除
かれ削手されたようだ。凝灰岩で
あるため倒木や地震のたびに崩れ
て割れてしまい六重になってしま
ったが、残石は元に残っている。
同地域北方芳山に建つ同時代の石
仏と共に修験僧の活躍の場となり
山岳仏教の跡の証である。また、
民衆もそれに同調したのは深い信
仰の山であった。現在塔は県指定
重要文化財。一方、この墓は關鷄
（ツグ）国（大化改新前の大和高
原南半分）の首長關鷄稻置大山主
命と伝承されていて、南隣福住に
鎮座する氷室神社の御祭神の御一
人である。それで夏まつり（旧六
月一日、現七月一日）参拝して、
白瓜三十二本を神饌として供える
ことになっている。何故、白瓜で
三十二本なのかについて正確な理
由は伝わっていない。關鷄稻置大

山主命と氷室については「日本書
紀」六十二年に額田大中彦命が關
鷄国へ狩に来たとき光るものを発
見。不思議に思った額田大中彦命
葉大山主命を呼び寄せ問うたと
ころ、答えて「寒い時期水を埋め
暑くなると取り出すのです」と。
大和高原の標高差による冬季の生
活の知恵だったのである。以後、
都に氷を献上するようになったと
記す。

今、天理市福住校区では、氷室
を復元し冬期に三トンの氷を当時
の記録の通り「かや」で覆い、夏
取り出して「氷まつり」を行い、
小学生、中学生も参加、色々なイ
ベントを盛大に行い歴史を現代に
生かした村おこしとして多世代の
交流に大きな役割を果たしている。
大和平野の水田開発と大和高原の
水田開発は時間差はあるが、それ
は又の機会とし、とにかく農耕は
恵みの雨を最もだいじとし早魃を
天の神龍神に「雨たんもれ」と祈
った。皇極天皇が「祈雨祈願」し
た記事は「紀」に六四二年とある。
祈雨神祭の制度化は天武天皇六七

五年頃であろう。雨の神は高禰神（タカオカミノカミ）または罔象女命（ミズハノメノミコト）であった。塔之森山頂を西へ三〇米余降ったところに写真のような社、池、井戸が祀られている。私が訪れたとき尋ねたご婦人は「子供の頃遊びに行つて井戸の蓋を動かして帰り大雨が降ったことがあります。必ず聞いてくださいます。」と話してくださった。早魃の年は村人が参り井戸の蓋を取るのだそうだ。社や寺が営まれるようになり塔尾寺と山王権現が中腹に建てられた。村中を守る神、仏として惣村の拠り所となった。村行事は正月行事から十二月まで神仏習合で僧侶が司つた（秋の祭以外）寺行事である。明治廃仏毀釈で寺を集落の近くに移して集会の場となった。近年モダンな公民館が建てられ現代に引き継がれた。社は日吉神社と名を買え古の心を伝えている。近郷の村々では兵隊に召集出征される時は家族は必ず武運を祈りに塔之森の山へ参つた。つまり各時代長きにわたり信仰し続け

られた。今は奈良市鹿野園（ロツキヤオ）―鉢伏―東金堂跡（トユンボ）―田原西御陵（光仁天皇父志貴皇子）―矢田原―国見山―塔之森―日吉神社―切りつけ地藏（元徳三（1331）年伊行恒作）―建長石仏―光仁天皇陵（桓武天皇父）―太安万侶墓等のハイキングコースとして健康増進、歴史探訪交流の場となり、形を変えて伝えられ多くの人を訪れている。